

在宅看取り介護

～QOL(Quality of Life)から QOD(Quality of Dying)へ～

2008. 10. 1 袖井孝子

1. 人口構造の変化：少産少死型社会から少産多死型社会へ
 - ・ 2016年に75歳以上層が65～74歳層を上回る。
 - ・ 現在は10人に1人が75歳以上。2026年には5人に1人が75歳以上。
 - ・ 2005年から死亡数が出生数を上回る。
 - ・ 2025年に死亡数（153万人）が出生数（73万人）のほぼ2倍。
 - ・ 大量死の時代を迎える。

2. いかにかに生きるかよりもいかに生を終えるかが重要な課題
 - ・ 住み慣れた家や地域で尊厳をもって老い、そして死を迎えるには。
 - ・ 満足死（本人、家族、医療職・看護職・介護職従事者にとって満足のいく終末期ケア）
 - ・ 質の高い死。QOLからQODへ（袖井孝子編著「死の人間学」金子書房）
終末期における自己選択と自己決定

3. 看取りの介護(the End of Life Care)の重要性
 - ・ 1970年代半ばに在宅死と施設死の比率が逆転。老人医療費の無料化の影響。
 - ・ 在宅死のほうが本人の満足度が高い。しかし、家族は必ずしもそうではない（日本福祉大学グループ調査研究結果）
 - ・ 施設よりも在宅のほうが費用が少ない（山崎章郎医師の報告）

4. 医療・福祉サービスの拡充と要介護になっても暮らし続けられる住宅の確保
 - ・ 在宅介護や在宅終末期ケアは必ずしも家族介護ではない。
 - ・ 在宅ケアの受け皿である住宅が整備されなければ、ザルで水を汲むようなもの。

5. その他
 - ・ インフォームド・コンセント、延命治療
 - ・ 医の倫理
 - ・ 専門職教育におけるいのちの教育ないし death education